

心不全センター設立から10年 多職種で患者の生活を支援



地域連携の中核担う役割も

県と協働し心臓いきいき推進事業



病院長新年ご挨拶

病院長 工藤 美樹



チーム力の向上

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の流行は、3年もの長い間続いています。広島大学病院におきましては、重症の感染者への対応を行いながら、通常どおりの診療を継続してきました。これは、入院患者さんへの面会制限など、皆さまのご協力のおかげと感謝いたします。今年こそ、新型コロナウイルス感染症の不安が終息し、行動制限なく活動できる日常を取り戻せることを願っています。

このたびの新型コロナウイルス感染の拡大で経験していますように、医療の現場におきましても先の予測が困難であり、これまでの常識では通用しない時代になってきています。このような時代を生き抜くうえで重要な要素のひとつとして「多職種で構成される医療チーム力の向上」が挙げられます。医療現場では医師だけではなく、多職種で構成される様々な形のチームによって医療が提供されています。より良い医療現場の構築のためには、それぞれのスタッフが十分なコミュニケーションのもとに互いの理解を深め、信頼関係を構築し、継続性のある強いチームを結成することが必要となります。強い結束力と団結力で日本中に多くの感動を与えたラグビー日本代表の「One Team」に倣い、One Teamでメンバーが主体的に個性や能力を発揮しながら一丸となって目標を目指す強い広島大学病院にしていきたいと考えています。私は、学生時代にはラグビー部に所属して怪我ばかりしていましたが、今年の9月にはラグビーワールドカップがフランスで開催されるのを楽しみにしています。

以前の病院ニュースでもお願いしましたが、より良い医療を目指すためには、病院側だけではなく患者さん側の視点もとても大切です。これまでも大学病院には患者さんやそのご家族などから多くのお声をいただいています。感謝やお褒めのお言葉だけではなく、厳しいご意見もあります。我々にとってはどちらもとても貴重なものです。それらを医療の現場に反映させることによって、広島大学病院がより良い医療をめざして進んでいくことができます。これからも忌憚のないご意見をお寄せ下さるようお願いいたします。

心不全センター10年 再発防ぎ重症化予防

2012年に広島大学病院に「心不全センター」(中野由紀子センター長＝循環器内科教授)が設置されてから10年が経ちました。心不全は心臓の機能が低下し、さまざまな症状が現れる症候群です。その中には心筋梗塞、弁膜症、狭心症などが原因で、入退院を繰り返し生命予後が悪い、深刻なものも少なくありません。患者数は120万人といわれ、今後更なる高齢社会による患者数の増加が想定され、『心不全パンデミック』として、警鐘が鳴らされています。心不全センターでは心臓病の再発防止や重症化予防を目的に、多職種が連携し入院中や退院後の患者ケアに取り組んでいます。一方、地域を挙げて心不全患者の生活の質の改善や悪化を防ぐ「広島県心臓いきいき推進会議」の事務局も担ってきました。今年2月12日には、10周年の記念大会も予定しています。

心不全センターは入院棟5階リハビリテーション科内に設置。看護師3人と事務1人が専従で、医師(循環器内科、心臓血管外科、リハビリテーション科、精神科)、歯科医師、看護師、理学療法士、作業療法士、管理栄養士、薬剤師、臨床検査技師、メディカルソーシャルワーカー(MSW)といった多職種が連携して、心不全患者の集学的治療の一翼を担っています。



心不全患者が入院すると、センターとして介入が必要かどうか、カルテ上で検討します。心不全再発で入退院を繰り返している方、あるいは心不全を再発しそうな方、治療に難渋し入院期間が長期化しそうな方、緩和的介入が必要な方などが対象です。主治医とも相談して患者へ説明し、センター介入について同意を得た後、まずは患者のベッドサイドへ循環器内科医とセンター看護師、管理栄養士、理学療法士らでラウンドを行い、これまでの生活状態や食事の仕方、喫煙や飲酒の状況などをじっくりと聞き取りします。それを元に、改めて多職種でのカンファレンスを実施し情報共有、検討を行い、生活習慣の改善として栄養面や薬の飲み方、療養の方法などを指導、助言していきます。「包括的心臓リハビリテーション」として、運動機能の回復を図るリハビリをはじめ、個々の患者に応じた療養指導を行います。これは退院後の生活を見据えた指導にもなり、その情報は転院先の医療機関や介護関係の担当者などへも提供し、患者を取り巻く多くの人たちの情報共有と意思統一により、急性期から維持期までの一貫したより良い療養生活を送ることを目指しています。

また、心不全にかかわらず心臓の疾患で入院、通院する患者、家族へ啓発のための心臓病教室も定期的実施しています(現在は新型コロナ感染症のため休止中)。

多職種チームを定着 学問から実践へ



開設時のセンター長

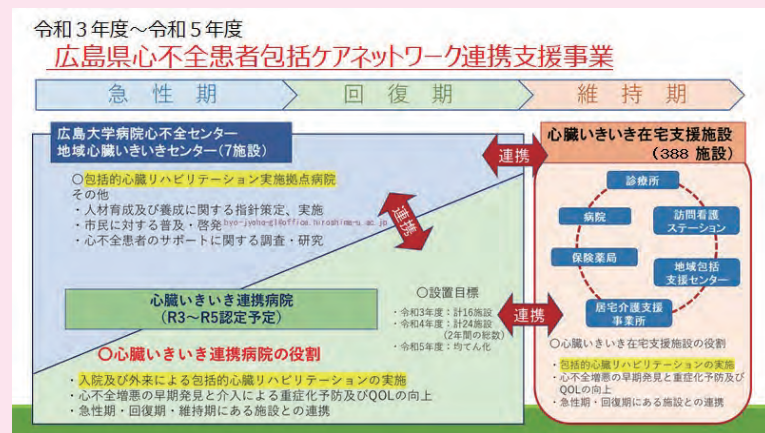
木原 康樹

神戸市立医療センター中央市民病院病院長
(広島大学名誉教授)

広島大学病院心不全センター活動は、「多職種チーム」を診療行為の必須要件として定着させると同時に、「心不全＝慢性心疾患」を学問の対象から実践のそれに再定義した。10年の歳月を経てその真価は不動のものとなったと喜んでいる。

心臓いきいき推進事業 一体的な地域ネット構築

心臓いきいき推進事業は心不全センターと広島県が協働で実施、まず県内7つの二次医療圏ごとに「心臓いきいきセンター」(広島市北部医療センター安佐市民病院、三次地区医療センター、中国労災病院、JA尾道総合病院、福山市民病院、JA広島総合病院、東広島医療センター)を設立しました。それぞれに大学病院と同様に多職種専門チームを配して、



患者の円滑な退院と在宅慢性期支援の体制を整備しました。2017年からは、急性期を終え地域に帰ってからの協力体制を強化しようと、地域の病院や診療所、歯科診療所、保険薬局、訪問看護ステーション、地域包括支援センター、居宅介護事業所などを「心臓いきいき在宅支援施設」に指定。388施設を認定しました。加えて2021年からは「心臓いきいき連携病院」として入院や外来による包括的心臓リハビリテーションが継続される医療機関の認定を進めています（2022年10月現在21施設）。転院先として回復期のリハビリを担う機関で、心臓いきいきセンター、心臓いきいき在宅支援施設と連携し、より一体的な地域ネットワーク構築を目指しています。

高齢化の進展に伴い心不全の入院患者はここ数年増え続けています。行政と医療機関が一体になった取り組みは「広島モデル」とも呼ばれており、団塊の世代が全員75歳以上を迎える2025年問題がすぐそこに迫る超高齢化社会の中で、より大きな役目を果たす重要な取り組みとなっています。

／ 広島県心臓いきいき市民公開講座 ／

10周年の記念大会は2月12日(日)午前9時から広島医東区の広島県医師会館で関係者による式典の後、午前10時15分からは市民公開講座「心臓いきいきフェスタ」として、ダンスでのリハビリや電子紙芝居などのステージ、検査体験や減塩レシピのブースなど盛りだくさんのイベントを準備しています。参加は無料、定員100人。申し込み・問い合わせはTEL082-257-5711(広島大学病院心不全センター、平日9:00～16:00)

県一丸で切れ目なく治療提供



中野 由紀子

心不全センター長(循環器内科教授)

今後も増加する心不全症例に対して、急性期・回復期・維持期まで切れ目なく最善の治療が提供できるように、心不全センターが中心となり広島県で一丸となって頑張っていきたいと思っています。

[illegible]

栄養管理部
情報

あぶらの種類



担当した管理栄養士

脂質は炭水化物・たんぱく質と並ぶ三大栄養素のひとつであり、エネルギー源となるだけでなく、ホルモンや細胞膜の材料となるなど、重要な役割を担っています。

脂質を構成しているのが「脂肪酸」です。大きく分けて「飽和脂肪酸」「不飽和脂肪酸」の2種類があり、構成する脂肪酸の種類によって脂質の性質は異なります。

飽和脂肪酸

ステアリン酸・パルミチン酸など

- エネルギー源や細胞膜の原料となる
- 摂り過ぎると血液中の中性脂肪・コレステロールを増加させる



牛肉や豚肉の脂



バター

不飽和脂肪酸

n-9系

オレイン酸

血液中のコレステロールを減少させる



オリーブ油



菜種油

n-6系

リノール酸・アラキドン酸など

血液中のコレステロールを減少させる



ごま油



卵白



レバー

n-3系

α-リノレン酸・DHA・EPAなど

血液中の中性脂肪を下げる



エゴマ油



アマネ油



サバ・サンマ
など青魚

n-6系・n-3系の脂肪酸は必須脂肪酸と呼ばれ、体内では合成できないため、食事から積極的に摂取する必要があります。

★日本人の食事摂取基準（2020年版）では、脂質の摂取量は1日の総摂取エネルギー量のうち20～30%に抑えることが望ましいとされています。

脂肪酸によって性質は異なりますが、エネルギー量はどの油も1g9kcalと、3大栄養素の中もっとも高いエネルギー量を有します。炭水化物・たんぱく質・脂質のバランスの良い食事を心がけましょう。





診療科最前線

「整形外科」

(診療科長:安達伸生教授)

▶ 診療科の特徴

整形外科は骨や靱帯、筋肉、関節、脊髄、末梢神経などの運動器の疾患や外傷を主に扱います。患者さんは乳児の先天性疾患から高齢者の変性疾患まで幅広く来院されますが、当科で特筆すべきはプロスポーツチームや実業団などのトップアスリートも多く来院されることです。



▶ 患者さんの動向

当科は脊椎、肩、肘・手、股関節、膝、足関節・足と関節ごとにエキスパートドクターがいるのが特徴で、そのほか外傷チーム、骨軟部腫瘍チームがあります。年間約2,000人の紹介患者さんを広島市内外から引き受けており、手術件数は年間約1,000例です。

▶ 得意分野

膝関節疾患:当科で確立された自家培養軟骨移植術は海外からも手術を受けに来られるほど全世界的に有名です。スポーツ選手の関節鏡視下靱帯再建術は全国でもトップレベルの技術を有しています。

超音波診療:運動器に対する超音波検査もいち早く取り入れ、外来には計5台の超音波器械が設置されており、超音波を見ながら患部に確実に注射をすることができます。

人工関節置換術:人工股関節、人工膝関節は通常の置換術のみならず最先端のロボット支援下手術も行っております。また肩ではリバース人工肩関節置換術という大きい肩腱板断裂などに適応される特殊な人工関節も行っております。

急性外傷治療:当院の高度救命救急センターと密接に連携し、骨盤骨折や脊髄損傷、重度四肢外傷などの治療に当たっており、救命はもちろん外傷後の後遺症を最小限に抑えることを目指しております。

足関節・足疾患:県内にも数少ない足の専門医が所属しており、外反母趾だけでなく先天性疾患や外傷後の変形性足関節症を含めて多くの患者さんを紹介いただいております。

▶ かかりつけ医との連携

特定機能病院である役割を果たすため、紹介いただいた患者さんの状態が落ち着けば速やかに紹介元の病院に戻っていただき、長期にわたり当院に来院いただく必要がないように調整しております。

▶ 新しい動き

磁力を帯びさせた自分の軟骨細胞を磁石で目的部位に運んで生着させるという新たな取り組みや新規の半月板再生に関する医師主導治験を行っており、今後の臨床応用を目指しています。また境界のわかりにくい骨軟部腫瘍においては、手術中にMRIを撮影することで完全切除を確認する方法を行っています。



催しのご案内

(2023年1月～3月)

自宅で学べる肝臓病教室

「なぜこんなにたくさん飲むの?肝臓病の薬」

公開日: 2022年12月12日(月)～通年公開

講師: 薬剤師 上代大地

開催方法: 肝疾患相談室ホームページからの視聴
(講演動画配信)

HP URL: <https://shounai.hiroshima-u.ac.jp/counseling/>
(「広大 肝臓病教室」で検索)

申込: 不要

問い合わせ: 肝疾患相談室

☎082-257-1541

(10:00～12:00 13:00～16:00)



がん治療を支える患者サロン

がん療養中の災害への準備

1月19日(木) 13:30～14:30

会場: 臨床管理棟3階 3F4会議室 /zoom

講師: DMAT 隊員

急性・重症患者看護専門看護師 佐々智宏

知れば怖くない!痛み止めの上手な使い方

2月16日(木) 13:30～14:30

会場: 臨床管理棟3階 3F2会議室 /zoom

講師: 薬剤師 山田行徳

がん治療中の口腔ケア

3月16日(木) 13:30～14:30

会場: 臨床管理棟3階 3F2会議室 /zoom

講師: 摂食嚥下障害看護認定看護師 平山順子

申し込み・問い合わせ: がん相談支援センター ☎082-257-1525

・会場参加は毎回10人